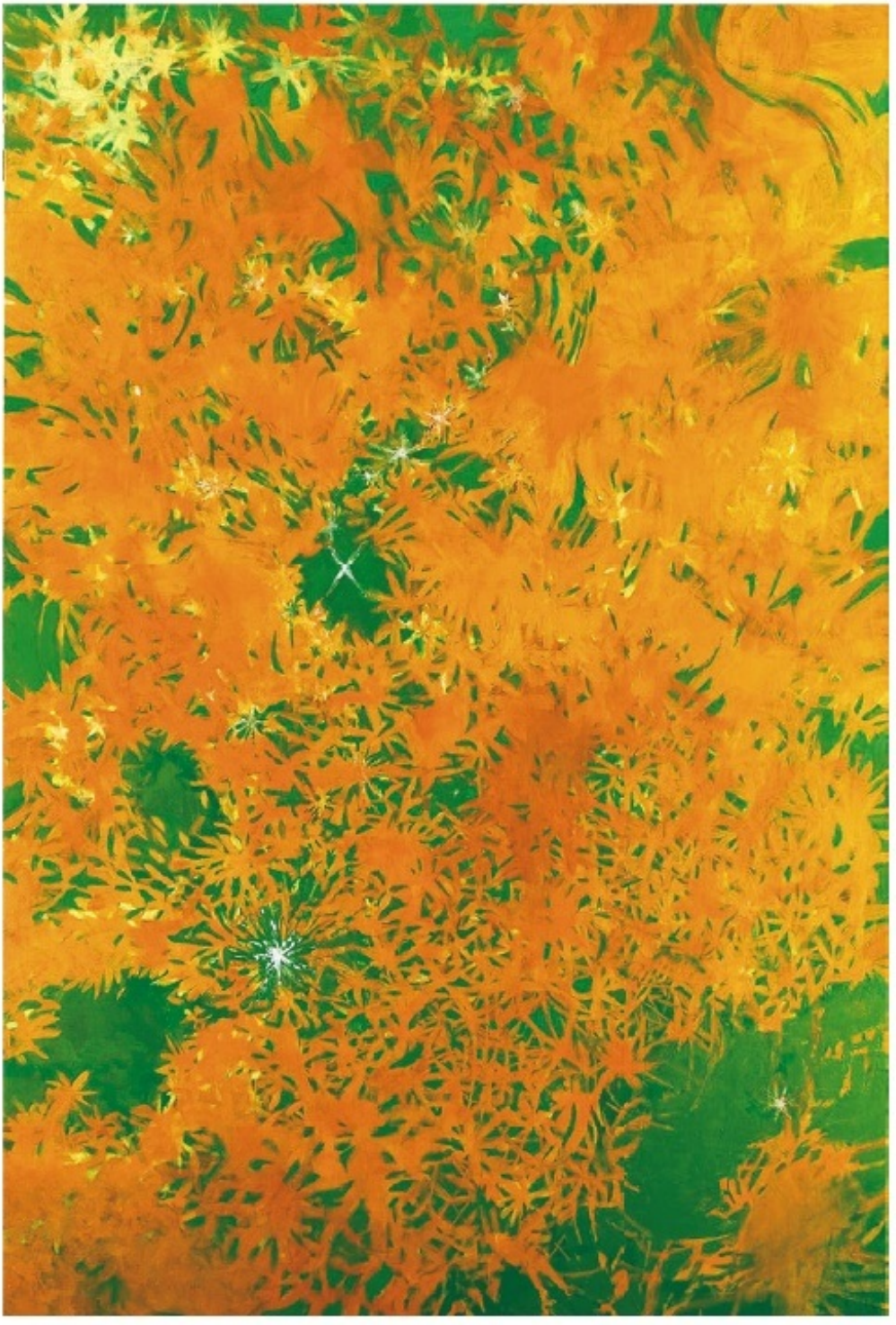
5th
2012夏

エルトラ

Makishima Ai

槙島 藍



「風来」 油彩・キャンバス F120号

槇島 藍 *Makishima Ai*
画家　1981年東京都出身
【作家のことば】
おおきな地震があって自分の終わりを意識したとき、なにかを表現してから終わりたいという思いをつよく持ちました。
大事な人たちのために、大事なものごとのために、描きたいです。

Information

槇島 藍
http://aimakishima.web.fc2.com/

石田倉庫アトリエ
http://www.ishida-soko.com/
制作場所にしている共同アトリエのホームページ

石田倉庫のアートな二日間（オープンアトリエ）
2012年11月3日（土）・4日（日）
※詳細は石田倉庫アトリエのホームページをご覧ください。

上段：「ディスタンスについて」油彩・キャンバス　F20号
下段右：「ねむるまで」 油彩・キャンバス　F10号
下段左：「あたらしいひとへ」 油彩・キャンバス　F12号

「Front Face」への掲載希望者を募集しています。くわしくはエリトア編集部まで。eritoa@mail.goo.ne.jp

シリーズ特集 Part I

表現の生まれるところ

シリーズ特集テーマ「表現の生まれるところ」。
そこはいったいどこなのか?
そこでは何が起きているのか?
考えるための第1弾は、「油絵具ができるまで」。
画家の表現を支える絵具。
その製造現場をレポートする。

油絵具ができるまで

1 油をつくる

油や他の原料を調合。熱で溶かしたら、缶に流し込む。

2 顔料と油を攪拌する

①で出来た油と顔料、助剤を配合し、ミキサーにかける。

埼玉県朝霞市にある、株式会社クサカベ。水彩絵具やビグメント、画筆といった様々な画材を製造及び販売している会社だ。その工場で、油絵具が作られているときいて、訪れた。

その日、案内してくださったのは製造部の長谷川さんと技術開発部の岩崎さん。

「製造部では、現在10人弱のスタッフが働いています。ミキサー、ロール、仕上げと部門ごとに分かれ、作業にあたっています。」

製造過程を見ると、どの工程も手作業が多いことに気付く。

「工場見学に来た人からはよく、意外と人の手がかかってますねと言われます」と笑う。「意外と重労働というか、手間のかかる作業ですね、とか」。

「工場」と聞くと、オートメーション化され、自動的に絵具が出来上がってくるようなイメージを持ってしまいがちだが、そうではないのだ。

絵具づくりはまず、油をつくるところから始まる。

「油は植物油。そのなかでも、空気中の酸素と反応して固まる性質を持つ、乾性油を使っています。」三種類の植物油を特徴によって使いわける。油やほかの原料を正確に配合し、機械に入れ、高温で溶かす。

次はミキサー工程。加工した油と顔料、助剤を機械で混ぜていく。

「これは、パン工場などでも使われている機械なんですよ。絵具づくり専用のものではないんです。」

スタッフのアイディアで用いられるようになったという。機械の特性をいかし、活用しているのだ。20～30分攪拌し、ペースト状になったら、ヘラを使って手作業で金属のタライに移す。

そして、「ロール」と呼ばれている工程へ。三本ロールミルという機械で絵具を練り上げる。回転するロー

ルとロールの間に通すことで、顔料の塊がほぐれ、油と均一になり、なめらかになる。

この工程が一番難しいと長谷川さんは言う。「ロールは機械のハンドル操作に気を遣います。熱で膨張してくるのにあわせて、ロールとロールの隙間を微調節する必要があるんです。適当に操作しちゃうと機械を痛めることにもなりますからね」。力と技術、そしてカンが必要な作業だ。

「それに、けっこう重労働なんです」ロールが回転している間、スタッフは前に立ち、回転をくぐり抜け、押し出された絵具をまたロールに載せる作業を繰り返す。この工程は15〜16時間続く。

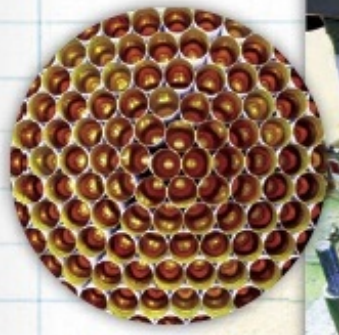
しかしまだ、完成ではない。練り上がった油絵具を待っているのは、品質チェックだ。「測色計や粘度計、グラインドメーターといった機械をつかっ

3 攪拌した絵具（えのぐ）を練る

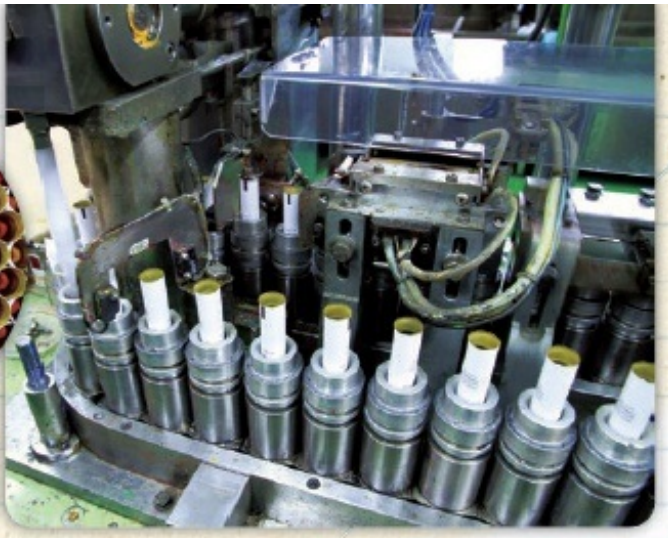
2日以上ロールで練り上げ、なめらかな絵具に仕上げてゆく。

4 品質チェック

練り上げ後、様々なチェックが行われる。左は粘度計で硬さを測定している様子。



空のチューブ。蜂の巣のようでもあり、宇宙ステーションのようでもあり。



5 チューブへの充填

自動充填機でチューブに詰める。その後、ラベラー機でラベル貼り。

6 仕上げと検品

ラベル貼りまで終わった絵具は、一本一本スタッフが確認。手作業で箱詰めする。

ラベラー機により次々とラベルをつけられていく。製品によっては手作業でラベルをつけることもあるという。

熟練したスタッフの目と手で一つ一つ丁寧に検品されていく。

て検査します。硬さや粒子の細かさをみるんですね。色は、基準色と照らし合わせてチェックします」材料の配合は同じでも、練り方やロールの隙間、そもそもの顔料の色合いなどによって、状態は異なるという。結果により粘度や色を調整する。グレーや中間色は、特に色の調整が難しい。「でも重要視しているのは、目視です。絵具を使うのは、結局人ですからね」。調整後、再検査し、クリアしたものを缶に入れ、熟成させる。

1週間から1か月ほど寝かされたあと、絵具は、ついにチューブに詰められ、出荷されるのだ。

ク

サカベでは2011年に新製品を2つも発売した。微香性油絵具「Zephyr（ゼファ）」と耐水性絵具「AQYLA GOUACHE」だ。「東日本震災もあり、大変な年だった。だからこそ、盛り上げていきたいんです。」

製品つくりの背景には、美術じたいを日本にひろめたいという思いがあるという。

「いわゆる専門家や画家を生業としている人だけでなく、もっと多くの人に使ってほしい。絵具は小さい頃に授業で使ったきりという人にこそ、手軽に使ってほしいんです。」

そのために、たとえば小学生が、たとえばアトリエを持たない人が、使いやすい画材の開発に力をいれている。

「Zephyr（ゼファ）」も、そんな使う人の声から開発された商品だ。油絵具特有の油脂臭をおさえ、ほのかないい香りを実現した。「新しい製品を開発することで、絵を描く人を増やす。そうすることで、美術というものじたいを元気にしていきたい。自社だけでなく、全体を盛り上げる動きに力を入れていきたいんです。」

思いをもった人たち、会社が生みだした絵具。それじたいが、ひとつの表現といえるのかもしれない。そしてそれが人の手にわたったとき、またひとつの表現である、絵画が生まれる。次号では、そんな絵が生まれるところを訪れたい。（つづく）

技術開発部の岩崎さん（左）と製造部の長谷川さん（右）

株式会社クサカベ

本社／本社工場　〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町 3-3-8
TEL 048-465-6661（代表）　FAX 048-465-7756
http://www.kusakabe-enogu.co.jp/

本社工場では、平日10人以上の絵画に関係する活動を行っているグループならば見学も受け付けている（詳しくはクサカベHPを参照）。

完成した絵具は梱包され、出荷を待つ。

7 完成

クサカベ油絵具セット
A-12（12色）
定価：5,355円（税込）

次号予告

次回「表現の生まれるところ Part 2」では、作家のアトリエを訪ねます。どうぞお楽しみに。

取材・文／井沢貴子　写真／笠原美恵

たちはらけいこのイラストワーク③

空色の魚

空色の魚が　手紙を運ぶ
町の上を
ふわふわ　ふわふわ
ゆったり泳いで

「あーきっと、　ここらへん」
配達は　まじめにやってるけど
方法は　いいかげん
時間の感覚が　人間とは違うらしい

あて先をさがして　漂っていたら
窓辺の人と　目があった
「や、どうも。　ごきげんよう」
「ごきげんよう、　配達屋さん」

街角には
手紙を書き終えたばかりの　女の子
次の集荷は　いつのことやら・・・

詩画集「物語の始まる日」より

創作絵本「いっついのはね」、詩画集「物語の始まる日」を手製本版と電子書籍版で販売しております。

【手製本版取り扱い店】
・ポレポレ書舗（http://www.polepole-shoho.com/）
・syoca（http://syoca.jp/）

【電子書籍版URL】
・いっついのはね（http://p.booklog.jp/book/20707）
・物語の始まる日（http://p.booklog.jp/book/18741）

立原 圭子　*Tachihara Keiko*

武蔵野美術大学短期大学部美術科卒業。2007年よりフリーのイラストレーターとして活動。主な仕事にカレンダーや年賀状素材集など。展示会や他ジャンル作家とのコラボレーション企画などを通じて活動の幅を広げる。絵本づくりはライフワークと決め、こつこつと製作中。 作品サイト http://k-coubou.sakura.ne.jp/

僕と鉄

第伍鋼　どこまで、作るか。

作品制作において、「どこまで作るか」、「どの時点で完成とするか」について、しばしば考えることがある。作品に足をつけるか、つけないか。構想通りに完成させたものの、もっと先に行きたい（手を加えたい）……など。

スケッチや設計図を描き、コンセプトを考えて制作する時もあるし、即興的にどんどん手を動かしていく時もある。どちらの場合も、絶対にここまでで完成という地点はない。

例えば、鉄の箱。やりすぎた例がこれだ。シンプルに、錆びた鉄の箱を作るという構想で制作にとりかかる。まずは、鉄の箱を作り、錆させるために野外に置く。

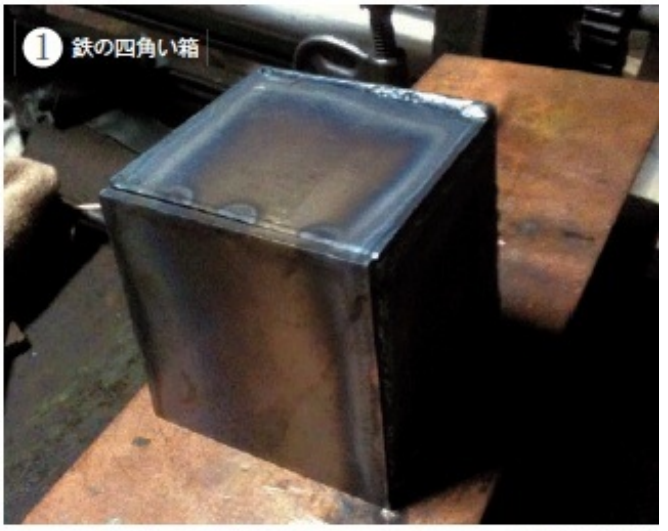
何週間も雨にさらし、毎日、何度も何度もその錆の状態を見ていると、四角い鉄の箱が僕の中であらたな展開をとげていく。

錆びた鉄の箱に「重力」というコンセプトを絡めてみたくなる。箱が重そうに傾いているというイメージ。重力に引っ張られる、ギリギリのところでバランスを保つ緊張感。そんなことを表現したくなったりする。

そして、当初の「完成」を超えて、さらなる制作に挑戦。もっと不安定に、もっと、もっと、と故意にバランスを崩していく。突然、（当然だが）箱の作品が自立しなくなり、転ぶ。

5 バランスを崩して倒れる

4 鉄の箱の角度を変えて不安定さを作る


1 鉄の四角い箱

6 足をつけてみる

3 鉄の壁と鉄の箱

2 雨にさらして錆をつける

鉄の猫ねむる（側面）

鉄の猫ねむる（上部）

上：鉄の猫の顔
左：鉄の猫ねむる

2、3日の間、その転んだ姿を眺める。そうすると、転んでいるのが我慢できないくらい、つまらなく見えてくる。足をつけてみよう。足をつけている作業中に、箱が鉄の壁から外れるハプニング。「やっちまった！手を加えすぎたことが裏目にでた」と思う瞬間だ。

また、しばらくこのまま眺めてみる。時折、意外にもそれが気に入ってきたりする。それが、現時点での僕を取り囲む環境の流れなのだ。自分の心の中に、偶然を受け入れる空間を持つ。

例えば、鉄の猫。これは、初めの制作プランに行き着く前に完成する例だ。錆びた鉄の猫を制作する。構想段階では、足もしっぽもある。顔を作って、胴体を作って、そして、雨にさらして錆びさせる。

顔と胴体を溶接してみる。眺めているうちに、それ以上なにもいらない気がしてくる。

数日眺めているうちに、「足と尻尾のない錆びた鉄の猫」が、自分の中で妙にしっくりくる。「これで完成にしよう。」

感覚的にしっくり来るとか、ちょっとした瞬間に自分の中で妙に辻褄があうとか、いたって主観的な視点が1つの作品づくりの終わりを告げてくれる。自分が変われば、現在の作品も過去の作品に対する見方も考え方も変わっていく。手元に過去の作品があれば、さらに手を加えたりもする。僕の作品制作には「完成」という着地点はないと思う。

⑦ 結局この形で落ち着いた

高橋輝雄 *Takahashi Teruo*
「心も記憶も酸化する」をコンセプトに、鉄を雨で錆びさせた立体や平面作品を制作。また、呼吸と咳によるドローイング、白と黒の絵画も手がける。東京、ロンドン、トロントにて展示活動中。
http://www.teruo-takahashi.jp

エリトアWEBで過去の記事も紹介しています。
ぜひご覧ください。http://www.eritoa.com

第4話

アートと
ふたりの生活

木村浩之 × 白井弓

アートに携わるふたりの暮らしを紹介する本コーナー。第4話目は、相撲をモチーフに絵画や彫刻などの作品を制作する木村浩之さんと、繊細なタッチで人物を描く弓さん夫妻。緑色のドアを開けると、ボーダーのシャツを着たおふたりと、一匹の猫が出迎えてくれた。

木村浩之「立ち合い」2010年　1167×910㎜
ポリエステル、岩絵具、白亜、墨、染料

木村浩之「朝」2010年　369×510㎜　綿布、岩絵具、墨

木村浩之「大鵬羅」2010年
364×519㎜　麻紙、岩絵具、白亜、墨、油

アトリエで「異形」(2011年作)の前に立つ浩之さん

木村浩之「相撲人形」2011年
陶器、顔料、墨

木村浩之　*Kimura Hiroyuki*

1975年東京生まれ。2003年多摩美術大学卒。2009年ギャラリーヘキサゴン(ドイツ)で個展。幼少のころより相撲、プロレスをこよなく愛する。稽古場や国技館で取材を重ね、相撲、柔道の稽古にも参加し体感した事を表現している。現在は個展を中心に絵画と相撲人形を発表している。講道館柔道弐段。
http://hiroyuki-kimura.com/

木村浩之さんは、相撲をモチーフに、絵画や彫刻などの作品を制作している。

「最初はプロレスを描いていたんですけど、もっと近くで取材できるものを探して、相撲部屋に行くようになりました。それから自分でも相撲を始めて。自分でやってみると、よりわかる部分がある。ロジカルに作るよりも、身体で感じた雰囲気を投影して作るのが好きなんです」。それに相撲は、見ていて飽きないという。「取材のときは、朝7時から相撲部屋に行って、9時くらいまで稽古を見て、それから国技館に行って、18時まで取り組みを見る。国技館では、午前中のうちは、前のほうで墨を使って描いていますね」。

弓さんは、主に人物を描く。「身近な、日常的にいる家族。祖父母、妹、友人。自分が親しくさせてもらっている人。そういう人たちの日常的な一瞬を描けたらなと思っています。公募展に応募する作品は大きいのばかりですが、ほかにポストカードサイズのものに、お菓子とか花を、ちょこちょこ描いたりもしています」そ

インタビュー中、終始穏やかな笑顔の絶えない浩之さんと弓さん。左写真の手前と下：木村浩之「相撲人形」2012年　陶器、顔料、墨、漆

上：白井弓「待」 2010年　F0号　麻紙、岩絵具、水干、墨、雲母
左：白井弓「くみこさん」 2012年　S40号　麻紙、岩絵具、水干、墨、雲母

アトリエで作品を見つめる弓さん

白井弓「おかし」2011年／「いちご」2012年（左下）　各148×100㎜　水彩絵具、顔料

う話しながら、「絵は続けているけれど、発表は全然していないんです。作品数も少ないし、取り組む姿勢も甘い。まだまだだと思っています」という弓さんに、隣から「この人はまじめだから」と浩之さんがやさしく言葉を添える。

ふたりが出会ったのは、大学時代。ふたりとも日本画を専攻していた。その頃から、ずっとお互いの作品を見てきている。意見を言うこともある。「やっぱり気にはなりますよね」。弓さんも頷く。「でも、一応言うけど、聞かないです。お互い頑固なんで（笑）。相手の言っていることは、的を射ていることだというのもわかるので、わかりつつ、痛いところ突かれた、みたいな。それで素直にうんと言えなかったり」。

お互いの作品の変化を感じることもある。弓さんは、浩之さんの作品について、動きを感じるようになったという。「最近、力士というより、パンっとものがぶつかる感じ、その音とか匂い、動きとかが表現に現れはじめたのかなと思っています」。対して、自分は、すごく迷っている時期にいる。「なんか、どうしようかな～と言いながら描いちゃっている感じですね」という弓さんに、「たぶん、小さいもののほうが向いているんじゃないかな」と応じる浩之さん。「彼女は几帳面に細かく描くのが得意なんですよ。最近は力士人形の絵付けも手伝ってもらっています」。

弓さんは、昨年から自宅で絵画教室も始めた。近所の子どもたちにほぼ一対一で教えている。そんな生活のなかで、大切にしていることは、続けていくことだという。「小さなものでも、毎日は無理でも、時間をつくって描くようにしています。いろいろ悩むけど、とりあえず手をうごかしていけたらな」。浩之さんは「何かしらは続けていくんでしょうけど、やっぱり身体で感じることを大事にしたい。作るタイミング、時間も、無理な努力はしない。感じのいいときに作って、やめて、そのローテーション」と語って、そのあたりは彼女と違うかもしれない、と笑った。「どちらかというと、根詰めているほうが好きでしょ（笑）」「そうかなあ。まあ、私は、細かいというか、くよくよしちゃうことがあるので、おおらかな人が近くにいて、助かっていますね（笑）」。

（編集部：文・井尻貴子／撮影・笠原雅恵）

白井 弓　*Shirai Yumi*

1978年愛知県生まれ。2006年多摩美術大学大学院卒。2001～03年、05年佐藤太清公募美術展入選。小さいイラストから大作まで日本画を中心に制作。観察や写生をもとに身近にある愛おしい人々、ものを描いている。現在猫のみると格闘しながら制作中！

×アート

kakeru art

（子ども×アート〈出前アート大学〉）

今号からはじまった不定期新連載「×（かける）アート」。アートと、人・もの・ことが関わる現場をとりあげていく。第1回のテーマは「こども×（かける）アート」。「アートの素晴らしさ、楽しさを子どもたちに伝えたい」という理念のもと、多摩美術大学校友会が実施している出前アート大学No.041「五重奏を描こう」の様子をレポートする。

写真提供：多摩美術大学校友会

2012年3月9日、埼玉県坂戸市立南小学校。教室からトロンボーンの音が聞こえてくる。中をのぞくと、6年1組の授業が行われていた。

講師はキギのアートディレクター植原亮輔さんと渡邊良重さん、作曲家の阿部海太郎さん。

今回の授業は、五重奏を楽器ごとに順番に聴き、音のイメージや感じたことを、それぞれ用意された紙に描いていくというもの。

たとえば、ピアノは大きめの単語帳をつかい、扇状に開くことができる。講師の海太郎さんが、教室のピアノを弾くと、「わかりやすい」、「えー、長い、難しい！」とさまざまな声があがった。「ひとつめのパートは、7分で6枚描きます」と植原さん。すぐにペンをとる子もいれば、「描けないよ～」と騒ぎだす子も。とはいえ、時間が来たら、終了。続いて、2パート目の演奏を聴く。今度は、4枚を5分で。全パート終了後、ピアノの演奏を通して聴く。「ページをめくりながら聴いてくださいね」。こどもたちの手元で、線や円が踊っていた。

昼休みを挟んで、5時間目は体育館へ移動。全校生徒の前で、授業で制作された作品の紹介が行われた。そして……舞台上に現れたのは、楽器を手にした演奏家たち。内緒で準備されていた、演奏会のはじまり！

アコーディオン、コントラバス、トロンボーン、ピアノ、パーカッション。今日聞いた、五重奏のすべてのパートがあわさり、目の前で奏でられた。

1時間目から5時間目まで、1日かけて行われた出前アート大学。

植原さんは、「気づきがおこる」ことを意図して授業内容を考えたという。「音を聴いて、絵にするなかで、いろいろな発見があったと思う」。「演奏を聴きながら、どんどん手を動かすことによって、無意識が作用してでてくるかたちにも出会う。こどものうちに、それを体験してほしいと思った」。

描き終わった5種類の紙を、五重奏のCDと一緒にオリジナルボックスに入れ、こどもたちに手渡すことにしたのも「この作品はタイムカプセルになる」から。「大人になってからでも、CDを聴いたら、描いたという経験が呼び起こされる。そこでまた、新たな発見があるかもしれない」。

渡邊さんも、「授業がはじまったばかりのときの発想力、勢いのよさはすごかった。でも、アイディアを出し続け、持続して頑張ることの大切さも感じてもらえたと思う」と言う。そして「ひとつひとつの音を、耳を澄まして聴く。素直に聴いて、感覚的に描くという体験をしてほしいと思った。そういう時間になったんじゃないかな」と語った。

こうして作られた自分だけの〝タイムカプセル〟。ボックスを開けるたび、こどもたちは繰り返し新たな「体験」と「発見」に出会うのだろう。

上下ともに、写真：笠原美恵

■ 出前アート大学

多摩美術大学校友会による、全国の小学校にアートを届ける出張型授業。
http://www.tamabi.ac.jp/alt/demaeart_site/top.htm

■ 講師プロフィール

植原亮輔（アートディレクター）／渡邊良重（アートディレクター）：広告・グラフィックデザイン制作事務所 DRAFT を経て、2012年1月キギを設立。アートディレクション、プロダクトデザイン（D-BROS 等）などを手掛ける。キギ　http://ki-gi.com/

阿部海太郎（作曲家）：演奏活動を中心に、舞台音楽、映画、CF などの音楽制作などに積極的に取り組む。植原と渡邊がアートディレクションに携わる仕事のコラボレーションも多い。http://www.umitaroabe.com/

文：井伏貴子

ネジ立体製作所

古田紀彦

第4回 動きのある作品

ネジ立体製作所所長古田です。今回の作品はクロールと平泳ぎです。この作品を制作するきっかけは、友人からのプールの誘いでした。その時見た友人の泳ぎは、とても綺麗なフォームで、それが強く頭に残っていたので、このアイデアが浮かびました。

ネジなどの部品は決まった形状で、どうしても動きのある作品にするのが難しいです。なるべくそのままの形状を生かしたい、と思い作りました。この作品は少しですが、動きを表現できてるかなぁ……!?と思います。

これからの私の課題はいかにして動きのある作品を作るかだと思っています。出来れば本当に動くような作品を目指したいと思っています。

古田紀彦
Furuta Norihiko

1973年埼玉県川口市出身。堀口自動車整備工場勤務。高校卒業後自動車整備士になりネジと共に20年。2009年3月ワークショップにて初制作。2010年9月ネジ立体製作所開設、所長となる。これからも身近にあるネジたちに愛情をこめ命を吹き込みつづける。

「ネジ立体製作所」ロゴデザイン：島谷美紗子

語り上戸

五杯目 ビールの泡とグラス

ビールが美味い季節になってきた！　一年中美味いんだけどね。

ビールの起源は、紀元前3000年。メソポタミアの謎多き民族シュメール人によって、パンを発酵してつくられた……なんて話はどうでもよくてね、大切なのはいかに美味いビールを飲むかということ。

そこで今回はよく耳にするビールの注ぎ方と、あまり語られることがないグラスの管理のしかたのはなし。

グラスは内側を布で拭いてはいけない。布の繊維や、静電気によりホコリなどがついてしまう。そのため洗ったあとは自然乾燥で乾かすので、洗う際のお湯は火傷をしない範囲でできるだけ高温のほうが良い。

また、食器などを洗ったスポンジには少なからず油が残っているので、グラス用のスポンジを用意したい。もちろん「ビール専用」のグラスを用意しよう。

さて、いよいよ注ぎ方。

○グラスを傾けずにテーブルに置く。わざと泡を立てるように少し高い位置から勢い良く注ぎ、グラスがいっぱいになったら止める。

泡が膨らむのでこぼれないように注意。

○泡が沈んでグラスの半分～3分の2ほどになるまで待ち、再度同じように注ぐ。泡が落ち着くのを待ってから、グラスの中心から静かに注ぎ、泡を盛り上げる。

泡が蓋の役目をしてビールを酸化から防ぐ。飲むときはグラスと泡の隙間から飲むようにして泡を最後まで残すように。

まあ、喉がカラッカラの時にキンキンに冷えたビールを一気に飲み干すのが一番美味いんだけどね！

酔生 *Sui Sei*
酒飲んだり・料理したり・印鑑彫ったり・酒飲んだり・イラスト描いたり・映画見たり・仕事したり・酒に飲まれたり・本を読んだり・モンスターをハントしたり・酒飲んだりしながら日々過ごしております。

Illustration : yosuke

新連載

縁（えにし）
～仏像奉納プロジェクト～

彫刻家・加藤魏山（かとうぎざん）と仏師・三浦耀山（みうらようざん）が中心となって仏像を彫刻し、被災地に奉納しようという活動を紹介します。

上：大槌の海／下：2012年3月11日、震災と津波から一年経った大槌町の今の様子。
（共に撮影：加藤魏山）

法要前の加藤魏山さん（左）と三浦耀山さん（右）。（Photo by Junichi Takahashi）

第1回 江岸寺を訪れて
～鑿入れ結縁法要～

大震災による津波と猛火で堂宇（どうう）の尽くを失った江岸寺。檀家のうち約700人が亡くなり、住職の大蓋生良寛（おおがいりょうかん）さん達ご家族も津波に襲われながら奇跡的に一命は取り留めましたが、父親と長男は未だ行方不明のまま……。

その震災と津波から一年を迎えた2012年3月11日、小雪の舞う中、江岸寺では一周忌法要とともに鑿（のみ）入れ結縁法要が執り行われました。

＊＊＊＊＊＊＊＊

前日の3月10日に仏師の三浦耀山さん、写真家のたかはしじゅんいちさんと共に岩手県大槌町に入った。その日に鑿入れ法要の準備を済ませ、江岸寺さんが用意してくれた宿に行き良寛さんと奥さん、娘さん達と一緒に食事をした。「こういう事がないと、こんな風に

【エリアと配布先一覧】

○埼玉県
【さいたま市】ギャラリー健【川越市】尚美学園大学メディアセンター／百丈そば
○神奈川県
【藤沢市】syoca
○千葉県
【千葉市】画廊　椿
○東京都／23区
【中央区銀座】Oギャラリー／画廊るたん／ギャルリー志門【中央区京橋】ギャラリー椿／ギャラリーなつか【荒川区】ギャラリー画廊【江東区】楽庵【渋谷区】Only フリーペーパー／手織週刊誌さをり【新宿区】The Artcomplex Center of Tokyo A.C.T／artdish／えすぱすミラボオ／ギャラリー絵夢／gallery坂／ドラードギャラリー【杉並区】GALLERY ノラや／ギャラリィ遊／古道具横ノ助【世田谷区】現代HEIGHTS【台東区】ギャラリー空【千代田区】ギャラリーf分の1／文房堂ギャラリー／On E drop cafe／アーツ千代田3331／ギャラリーUG／馬喰町ART+EAT【豊島区】atelier bemstar【港区】Pinpoint Gallery
○東京都／多摩地域
【国立市】ギャラリーモンド／ギャラリーゆりの木【国分寺市】café slow／switch point【武蔵野市吉祥寺】アート吉祥寺／Café & Galeria PARADA／Gallery 畑 SATORU／ペルペット吉祥寺店
○愛知県
【常滑市】スペース樂遊館
○大阪府
【大阪市】Calo Bookshop & Cafe
○兵庫県
【神戸市】ポレポレ書舗
○長野県
【飯田市】アートハウス【佐久市】ネモファニチャー【塩尻市】塩尻市立図書

一周忌法要と、魂入れ法要の様子 (Photo by Junichi Takahashi)

上：魂入れ法要の様子。江岸寺住職の大量生良寛師（左）と弟の大量生知明師（右）（Photo by Junichi Takahashi）
右：法要が行われた後、宗派を超えた各宗派の僧侶が大槌町の町を供養行脚する様子。（撮影：加藤魏山）

皆で食べないからね……」と良寛さんがおっしゃっていた。何気なく口にされる言葉に被災された方の〝今〟の現状を垣間見るような気がした。ほんの些細な事とも思われる日常の事が、いかに大切で愛おしいものか改めて気付かされる。「当たり前」にあると思っている日常の事が、ここでは当たり前に〝無い〟のだ。それでも、被災された多くの人は静かに、そして一生懸命生きている。

法要当日、約350人の方に鑿を入れて頂き仏像とのご縁を結んで頂いた。目で何かを訴えようとされる方、悲しみを堪えている方、家族の遺影を持った子供……。お

Photo by Junichi Takahashi

ひとり、おひとりの鑿を入れる手に手を添えて言葉にはならない心の奥にある思いの端にほんの少し触れる事が出来たような心持がした。

鑿を入れて頂いた多くの方の想いを引き継ぎ、その責任の重さをしっかりと受け止めて釈迦如来像を彫り上げたいと強く心に誓った。

（文：加藤魏山）

加藤魏山 *Katob Gizan*
1968年東京、両国生まれ。埼玉県白岡町在住。高村光雲の流れを汲む仏師・岩松拾文師の下で修業を重ね独立。仏像の他、日本の古典や歴史を題材とした作品を制作。2004年日展入選。09年「木彫三人展」（日本橋三越本店）、「-技と和み-木彫秀作五人展」（大阪タカシマヤ）日本橋三越、大阪、名古屋タカシマヤを中心に発表の他、寺院に納める仏像を彫刻。12年、大阪タカシマヤにて個展予定。

三浦耀山 *Miura Youzan*
仏師。1973年埼玉県富代町出身。滋賀県大津市在住。1996年早稲田大学政治経済学部卒業。一般企業で会社員をしていたが、ふとしたことから仏像を彫りたくなり、1999年大仏師渡邊勢山に師事。以後、師の下で数多くの仏像彫刻・修理に携わる。2011年、雅号を「耀山」とし活動を始める。

- 縁プロジェクトウェブサイト
  http://www.butuzohono.org
- Facebook 仏像奉納プロジェクトページ
  http://ja-jp.facebook.com/butuzohono
- Twitter ／@butuzohono_tag

館【松本市】まつもと市民芸術館

◎配布先の詳細はエリトアのホームページをご覧ください。
エリトアホームページ
http://www.eritoa.com/

◎エリトアではアート関連情報、宣伝・広告を募集しています。
◎設置をご希望の方は別途ご案内をいたします。
◎本誌へのお問合せ等は編集部まで、お気軽にご相談ください。
エリトア編集部
eritoa@mail.goo.ne.jp

【編集後記】

コーヒーメーカーの下部分のガラスのやつをこないだ割ってしまったのでコップに直接ドリップするんだけど、ふたつめのコップの方は味が薄くなるよね。でもなぜか下のガラスのやつを買わない。だからいつもぼくのと島谷（嫁）のは濃さが違うんだけど、そういうコーヒーを窓辺のソファで飲みながら、大好きな作家の作品を愛でるのっていいよね。

2012年6月　高瀬きぼりお

編集・発行人／木村和弘
編　集／井尻貴子
笠原美恵
ロゴデザイン／高瀬きぼりお
本文レイアウト／吉野亮

エリトア

第5号 2012夏

2012年6月15日発行

エリトア編集部 〒350-1301 埼玉県川越市大字的場2835-5-201 http://www.eritoa.com/ E-mail eritoa@mail.goo.ne.jp
編集・発行人／木村和弘
○本誌掲載の文章、写真、イラストなどの無断転載・複製(コピー)は禁じられております。